

平成 21 年 5 月 8 現在

研究種目：若手研究 (B)
研究期間：2007～2008
課題番号：19730406
研究課題名 (和文) 社会性を支える高次の心的状態の理解に関する認知発達の研究
研究課題名 (英文) Cognitive developmental study about the understanding of higher-order mental states related to sociality
研究代表者
林 創 (HAYASHI HAJIMU)
岡山大学・大学院教育学研究科・講師
研究者番号：80437178

研究成果の概要：

本研究は、社会性を支える心的状態の理解に着目し、人間のとくに道徳的判断に関する認知発達の過程を明らかにすることを目的とした。研究の結果、一般的な人間が、日常的な場面で認識している不作為のパターンを明らかにした。また、作為の方が不作為より悪く感じる「不作為バイアス」の発達過程を検討したところ、児童期の8歳頃には生じるものの、一度弱くなり、年齢が増すと再び強くなるという発達過程があることが示唆された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	700,000	0	700,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,300,000	180,000	1,480,000

研究分野：認知発達心理学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：作為、不作為、認知発達

1. 研究開始当初の背景

私たちは日常的に、他者の「信念 (belief)」や「意図 (intention)」といった心的状態 (mental states) を理解することで社会的な関係を適切に築いている。このような心の理解に関する枠組みは、「心の理論 (theory of mind)」と呼ばれ、広く知られるようになっている。

私は、これまで「心の理論」研究の枠組みに沿いながら、とくに高次の心的状態 (二次の心的状態) の理解の問題をテーマとして、幼児期から児童期の子どもの社会的な心の発達を明らかにしてきた。これは、このような高次の心的状態を理解できることが、人間らしいコミュニケーションなどを成立させ、社会性を支える要因のひとつと考えられた

からである、本研究は、これらの成果を踏まえて、さらに社会性の発達を支える上で他者の心の理解をすることが重要であることを示そうと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、社会性を支える心的状態の理解に着目し、人間の認知発達のプロセスを明らかにすることを目的としたものである。具体的には、社会性が発揮される場面として、とくに道徳的な判断に注目し、高次の心的状態が理解できる児童期の子どもたちにとって、作為（積極的な動作や言葉を伴うタイプの悪事）と不作為（積極的な動作や言葉を伴わないタイプの悪事）の認識に違いがあるかどうかを、不作為バイアスの出現の割合によって、発達的に検討することにした。

3. 研究の方法

(1) 先行研究や法律の専門書などを参考に、作為と不作為の違いを確認した上で、一般的な人間（調査対象者は大学生）が、どのような場合を不作為と認識しているのかを調べた。これはこれまでの研究のサンプル数が少なすぎたため、調査対象者を増やすことで、結果を安定化させることを目的とした。

具体的には、B4判の調査用紙を用意し、左側に教示文を配置した。また、右側を回答部分とした。教示文では、悪事について、積極的な動作がある場合とそうでない場合があることを例示しながら、積極的な動作が伴う場合を「作為」、積極的な動作がない場合を「不作為」ということを明示した。その後、「これは不作為だ（積極的な動作がない悪事だ）」と思う例があれば、自由に何でも書い

てくださいと記した。日常的な事例でかまわないことを教示し、凶悪な例ではなく、ふだん身の回りで起こっていることに注意が向くように誘導した。

(2) 上記(1)の結果をもとに、作為と不作為に関して、凶悪な犯罪的なものではなく、日常的な場面に置き換えた課題を、高次の心的状態が理解できる児童期の子どもを対象に実施した。カウンターバランスを考慮し、調査対象者を増やした。

具体的には、絵本形式で、(1)の結果から得られた分類をもとに、5つの課題を用意した。各課題は、お話①とお話②で構成され、一方のお話は「男の子が何かをする（言動あり：作為）」ことで、もう一方のお話は「何もしない（言動なし：不作為）」ことで、どちらも男の子が何らかの得をするお話とした。行為を生み出した男の子の心的状態（「意図」）や、生じた「結果」は、2つのお話のそれぞれで同じ文によって表現し、同等とした。「どちらの男の子がより悪いことをしましたか？」と聞いて、作為のお話の方がより悪いことをしたと答えた場合、不作為バイアスが生じたと判定し、年齢ごとに、その割合を算出した。

4. 研究成果

(1) まず、一般的な人間がどのような場合を不作為と認識しているのかを調べた研究では、意図がある場合とない場合に分けられ、意図がある場合には、わざと何もしないことで不利益を生み出す場合や面倒がって何もしない場合など複数に分類できた。これにより、一般的な人間が、日常的な場面で認識している不作為のパターンが明確化し、これまでの結果を頑健にすることができた。

(2) 児童期の子どもを対象とした調査の結果、

不作為の認識には心的状態（意図）の理解が重要であるとともに、結果や行為の背後の意図が同等の場合は、作為の方が不作為より悪く感じる「不作為バイアス」の出現する過程を明らかにすることができた。具体的には、不作為バイアスは、児童期の8歳頃には既に生じているものの、一度弱くなり、年齢が増すと再び強くなるというU字（U-shaped）型の発達をする可能性が高いことが示唆された。

これまで不作為を扱った研究の対象はほとんどが大人であり、不作為の認識の発達過程を調べた研究は国内外ともにほとんどないことから、日本人における不作為の認識の発達過程を部分的ではあるが明らかにできたことは、今後のこの分野の発展にとって重要であると言えよう。また、不作為の理解の問題は、法律との関連も深く、人間の道徳的意識や法的な認識の問題にも、新たなインパクトを与えることができると思われる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

① 林 創（印刷中）. 作為と不作為の比較に関する認知発達 — 不作為に対するバイアスの変化 — 『発達研究』, 23, ページ未定（査読無し）

② 林 創（2008）. 作為と不作為の理解に関する認知発達の研究 『発達研究』, 22, 229-234.（査読無し）

<http://www.coder.or.jp/hdr/22/HDRVol22.2.1.pdf>

③ Hayashi, H.（2007）. Children's moral

judgments of commission and omission based on their understanding of second-order mental states. *Japanese Psychological Research*, 49, 261-274.
（査読有り）

DOI: 10.1111/j.1468-5884.2007.00352.x

〔学会発表〕（計6件）

① 林 創（2009）. 児童期における作為と不作為の寛容さの比較 日本発達心理学会第20回大会（日本女子大学）（2009/03/24）

② 林 創・大塚雄作（2008）. 関西地区の大学教育における授業評価の現状 日本教育心理学会第50回総会（東京学芸大学）（2008/10/12）

③ 林 創（2008）. 日常場面における積極的動作がない不作為の認識 日本心理学会第72回総会（北海道大学）（2008/09/20）

④ Hayashi, H.（2008）. *Young children's understanding of the harm through actions and inactions*. Poster presented at the 20th Biennial Meeting of the International Society for the Study of Behavioural Development, Würzburg, Germany.（2008/07/16）

⑤ 林 創（2007）. 行為に伴う言動の有無による結果に与える影響の判断の違い 日本教育心理学会第49回総会（文教大学）（2007/09/16）

⑥ Hayashi, H.（2007）. *Is there a developmental difference in recognizing*

the harm through actions and inactions?

Poster presented at the 15th Conference
of the European Society for Cognitive
Psychology, Marseille, France.

(2007/09/01)

〔図書〕（計2件）

① 林 創 (2008). 『再帰的事象の認識とその
発達に関する心理学的研究』. 風間書房.
総ページ数185

② 林 創 (2007). 発達の理論 — 発達を見
つめる枠組み. 藤田哲也（編）『絶対役立つ
教育心理学 — 実践の理論, 理論を实践
—』. ミネルヴァ書房. pp. 117-131.

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

〔その他〕

とくになし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

林 創 (HAYASHI HAJIMU)

岡山大学・大学院教育学研究科・講師

研究者番号：80437178

(2) 研究代表者

とくになし

(3) 連携研究者

とくになし